

# NEWSLETTER NO.8

## 世界津波の日(11月5日) 記念国際シンポジウム開催 ジェンダー・多様性の視点からの復興 をめざして -10月27日 世界銀行東京事務所にて-

CWS Japanは、多方面多数の団体参画・協力のもと、防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）の運営メンバーとして、「世界津波の日 記念国際シンポジウム」を共催しました。シンポジウムに先立った東日本大震災の被災地訪問（講演者）及び国内外問わず様々な災害・復興現場の事例共有から多くの学びを得ました。発表されたケーススタディは、フィリピンでの防災・減災活動、ネパール大地震復興住宅建設、気仙沼市防潮堤建設計画、石巻市地域復興まちづくり。パネルディスカッションでは、「復興にはジェンダーと多様性の視点が何故必要なのか」という問いを掘りさげ、災害時における人々のニーズの多様性（性別・年齢・場所・言語・宗教・民族・家族の状況・障害の有無などの様々な要素）とその変化への対応力、女性が積極的に参画する災害リスク削減活動に関する課題について、未来志向の議論が交わされました。

## アフガニスタンから防災関係者を招聘

11月20～25日にかけて、アフガニスタン国の国家災害庁（ANDMA/日本の内閣府のように災害関係を調整・統括する政府機関）及び防災・災害対応関係のNGOを日本に招へいし、今後の協力関係を話し合うというプログラムを実施しました。東京での会議に加え、仙台や石巻訪問もし、日本の行政（仙台市）や大学（東北大学）による防災対策、また市民が災害リスクを後世にどの様に伝えていっているのか、様々な事を盛り込みました。

本シンポジウムで確認された最も大切な教訓とは、復興の多様性の認識、コミュニティの主体性向上、行政の寄り添い型支援とコミュニティとの対話、コミュニティの防災・復興計画における女性のリーダーシップの重要性（生活者の視点、次世代を考慮に入れた意思決定、地域基盤の復興と生活復興の橋渡し、支援される側から支援する側にたつ責任）でした。これらの教訓を活かしつつ、合意形成のプロセスに要求される緊密さ・丁寧さ・創造性と意志決定にあらかじめ設定される時間軸との間のジレンマから目をそむけない姿勢を持ち続けることも、災害に強い社会へ寄与する重要な要因であることを示唆する機会となりました（文：阪口佳恵）



かたりべによる東日本大震災被災体験共有 @ つなぐ館  
（協力：ピースポート石巻）

本このプログラムはジャパンプラットフォーム（JPF）のアフガニスタン人道支援プログラムの一環として実施され、CWS Japanはその企画・調整を担いました。最終日にはANDMAとJPFの間で協力覚書が交わされ、今後もアフガニスタンの防災や災害対応に日本として積極的に貢献するという想いを参加者一同新たにしました。本招聘プログラム中に確認された優先事項に関しては、現在フォローアップ・実施をしています。

ただでさえ紛争が絶えないアフガニスタンにおいて、少しでも住民の方々のリスクを減らすことが出来れば。そして、少しでも安心・安全な国づくりに貢献出来ればと切に願います。

(文：小美野 剛)



最終日、優先事項のプレゼンテーション（ANDMA、アフガニスタンNGO、日本NGO、JPF）

## ララ70周年記念フォーラム 「今伝えたいララからのメッセージ」

これまで何度か本Newsletterでお知らせしてまいりました「ララ70周年記念フォーラム」および「ララ写真展」を、去る11月30日（水）に、ここ早稲田奉仕園スコットホールとスコットギャラリーにて同時開催いたしました。心配していたお天気にも恵まれ、計109名の方々が遠くは北海道や神戸から集まって下さいました。当初から想定していたとおり、来場者の平均年齢は高く、下は20代から上は90代までと幅広い年齢層の方々が集まって下さいました。中にはララ物資の恩恵を受けたという方々やララ物資を輸送した運送会社（東京貿易運輸）の元社員の方が息子さんと一緒に来場して下さいましたことに非常に感銘を受けました。

今回のフォーラムは、セピア色をイメージカラーに、70年前の北米クリスチャンによる愛の奉仕と宣教師達による献身的な人道支援に思いを馳せるノスタルジアと現代の人道主義とこれからというコントラストを味わっていただけるような二部構成にしました。そこで過去と今をつなぐために用いたのが『ララの5つの精神』である「公平性」「自主性」「尊厳」「官民協働」「あらゆる相違を超えた分かち合いと人道主義」でした。ララ物資を送り出した米国側と受け取った側から

の団体代表者による各スピーチに続いて、今日の人道支援に関わる登壇者5名がそれぞれの立場で5つのララの基本精神に基づく活動を共有した上で、今後の支援のあり方について意見交換を行いました。

フォーラムの後は、写真展会場であるスコットギャラリーに場を移し、手作りのお茶とお菓子をいただきながら写真を囲んで歓談の時を持ちました。また、早稲田奉仕園ゴスペル講座生徒の女性グループによる明るく力強いゴスペルクワイアは会場を盛り上げ、場の雰囲気は大いに和ませてくれるものでした。

今回、来場者の多くが、ララや3人の宣教師達（G・E・バット博士、エスター・B・ローズ女史、ミカエル・J・マキロップ神父）に何らかの縁のある個人や団体の方々であったせいか、クリスチャンが中心でしたが、研究者でララ物資を研究対象にしている方々も来られ、ララの持つ隣人愛の魅力が詰まった温かみのある催しに仕上がったと思います。

今回のフォーラムは数えきれないくらい多くの方々からのご協力によって実現できました。ララと同時に70周年を迎えたCWSのルーツを探ることができた思い出深いフォーラムとなりましたこと、感謝を持って報告させていただきます。

(文：牧 由希子)



第一部：ララからのメッセージ  
～講演及び制作ビデオ上映～



第二部：未来へ受け継がれるべき人道支援の精神について  
～パネルディスカッション～

**RIF-Asia 開催**  
**－今回の4つのテーマ－**  
**「災害リスク削減の地域定着化」**  
**「災害多発地域の選択肢とは」**  
**「清潔な水をすべての人たちへ」**  
**「災害時の栄養不良の軽減」**

12月6～7日、タイ・バンコクにてRegional Innovation Forum-Asia (RIF-Asia) というイベントが開催されました。この企画は私が事務局長を兼務するアジア減災災害対応ネットワーク (ADRRN)、日本でのイノベーションを推進する活動として関わるMore Impact、そして北京にある防災研究所 (IRDR) や国連機関 (OCHA・UNDP) との共催で実現しました。

アジアは世界で一番災害が多発しており、影響を受ける人の数もけた外れに多いと言われています。本今年5月に開催された世界人道サミット (WHS) においても「このままではいけない」と現在の人道・災害状況に警鐘が鳴らされていました。「今まで解決出来なかった問題を解決する」、そんな想いを胸にRIF-Asiaの運営に関わりました。

アジア全域からNGO・大学・企業・国連機関などが集まり、テーマ設定された課題に対しての解決策を話し合いました。そこから出てきたプロジェクト案を実現できるよう、密にフォローアップをしていく次第です。

(文：小美野 剛)



第1日目：4つのテーマグループにわかれて解決課題をブレインストーミング



第2日目：課題の背景から原因の特定のプロセスを経て、具体的プロジェクトのプレゼンテーション